

令和元年度 全国高等学校総合体育大会（南九州総体） 大会総評

報告者：高体連技術部員 南稜高校 横山晃一

7月25日から8月1日にかけて沖縄県で開催された全国高等学校総合体育大会に、本県からは西武台高校が出場した。決勝戦は桐光学園高校（神奈川県第1代表）対富山第一高校（富山県代表）の顔合わせで、終了間際に決めた劇的なゴールによって桐光学園が念願の初優勝を果たし、準優勝は富山第一であった。桐光学園は昨年度準優勝をしており、2年連続の好成績となった。西武台は27日の2回戦から登場し、高知高校（高知県代表）と対戦した。結果は0-4と完敗を喫し、厳しい現実を突きつけられることとなった。

以下にまず西武台の試合分析をまとめ、次に今大会全般の振り返りを記載する。

1 西武台0【前半0-2、後半0-2】4高知

高知高校は1-4-2-3-1、西武台は1-4-3-3の布陣でスタート。西武台は県予選では途中出場が多かったMF⑩池田を先発としたことから、チームとして攻撃的に入る意図が感じられた。立ち上がりは互いに相手のボール保持者に対しての守備意識が高く、中盤エリアでの球際の攻防が続く。西武台は、ボールを奪うとすぐにサイドへ展開し、ピッチをワイドに使うと人とボールを対角に動かす攻撃を仕掛けようとしていたが、最終ラインを突破するまでには至らない。高知はボール奪取後、相手守備位置がよく見えており、速攻かボール保持優先かの判断を適確に行いながら西武台陣地への進入を試みる。拮抗していたのは序盤のみで、次第に高知が流動的なポジション取りによって西武台のプレスを剥がして優勢に立つ。SBがサイドで高いポジションを取り、西武台の両サイドを押し込んでスペースを作ると、2ボランチ（特に長身の⑤小黑）が高知DFラインのスペースに上手く降りてビルドアップに加わる。中盤より前の選手は西武台の選手を上手く挟み込む位置取りを以て絞らせず、そこへ長短織り交ぜた質の高いパスが入る。高知優勢のまま、クーリングブレイク後の左CKで、MF⑧吉尾の精度の高いライナー性のボールをCB③松本に合わせられ失点してしまう。その後も高知はビルドアップで押し込み、ボールを失った直後に質の高い連動した守備をして高い位置でボールを奪い返し、ショートカウンターを繰り返す。35分にはその形から最後は裏に抜け出したMF⑩野島が鮮やかなボレーを突き刺して前半を終える。

後半、西武台は前線から激しくプレスをかけ、高知の守備陣を下がらせ、サイドを起点とした攻撃でペナルティエリア内への進入を増やす。前半とは逆に西武台が高知陣地でプレーをする時間帯が多くなる。だが、ゴール付近まで入っていくものの、高知DFが距離感を縮めて中央を締め、体を張ったDFで枠へのシュートを許さない。また、奪った直後の西武台のハイプレスをかいくぐるのが難しいと判断した時には、シンプルにロングボールで陣地を回復し、西武台守備の連動性を切る。69分には西武台が攻撃に人数を掛けて生まれたスペースを上手く突かれ、カウンターから前線に残っていたFW⑨楠瀬に追加点を決められてしまう。終了間際には不用意なバックパスに厳しく寄せられ、CKを取られる。その右CKを高知キャプテンのCB④林に豪快に頭で押し込まれ0-4での敗戦となった。

西武台はピッチの幅を使ったワイド攻撃を得意とするが、高知は見事にサイドで連動したプレスを掛け、自由を奪っていた。悔しい敗戦となったが、この全国の舞台での経験値を活かし、これから迎える選手権での活躍に期待したい。

2 大会全般について

1回戦から決勝戦まで51試合の対戦カードが組まれた。全ての試合を見ることはできなかったが、大会期間中に行動を共にした技術部員によるディスカッションや公式記録などから浮かび上がってきた今大会の特徴について考察したい。

(1) 選手交代

全国総体の競技規則では、登録17名（交代要員6名）のうち、5名までを交代することができる。1試合あたりの交代回数を割り出したところ、3.039回であった。平均すると2回を残した状態で試合を終えており、予想を下回る回数であった。ちなみに優勝した桐光学園は5試合で合計8回という数字で、ベスト8に残ったチームの中では最も少ない1試合あたり1.6回となっている。

(2) システム

3回戦以降まで勝ち進んだチームを見てみると、先発選手の入替えはあってもシステムは変えずに試合に入っている場合がほとんどであった。対戦相手の形によって変えるのではなく、総体に臨む準備段階で磨きかけた自分たちのスタイルを信じて戦うチームが多かったといえる。また、DFラインに関しては3バック（もしくは5バック）の奇数で戦うチームは52チーム中8チームで、4バックを基調とするチームが多かった。最近の主流となっている、ビルドアップ時にCBが広がってその間にアンカーが下り、両SBが中盤の位置まで押し込んでボールを前に運ぶという方法を取るチームが多かったことが理由の1つと考えられる。そんな4バック主流の中であって、準決勝では尚志高校（福島県代表）を除く4チーム中3チームが3バック（5バック）を採用していたところは注目すべきポイントである。

(3) 試合展開

先制されながら逆転勝利をしたという試合は全51ゲームのうち4ゲーム（うち2試合はPK戦までもつれ込む）のみであった。

(4) 得点

今大会の総得点は以下の表の通りである。今大会より埼玉・千葉・愛知の出場枠が2から1に減ったことにより、出場チーム数は55から52チームとなっている。そのため単純な総得点ではなく、1試合あたりの得点数を算出してみた。すると、近々の5大会で最も低い1試合あたり2.25点という結果となった。各試合の内容を見てみると、その主たる要因は決定力という部分ではなく各チームの戦い方にあると私は考えている。今大会は、試合序盤こそリスクを避けて落ち着くまでは比較的ノーリスクで長いボールを蹴る傾向のチームが多かったが、すぐにしっかりと後方からGKやアンカーの選手が良いポジション取りをして組み立てていた。後方のビルドアップがしっかりしているチームが多いので、DF時には前から激しくプレスを掛けるよりもミドルサード以降にプレスラインを構えて待ち受けるチームが多かった。そのことがゴールシーンの減少した原因の1つではないかと考えている。またセットプレーに関しても、直接FKを除いてシンプルに合わせられて決まった得点は総得点の1割に満たないことから、CBやGKを中心に高さに対する守備の強さが出ていたのではないだろうか。

2015年	182点	54ゲーム	3.3703点
2016年	147点	54ゲーム	2.7222点
2017年	155点	54ゲーム	2.8703点
2018年	166点	54ゲーム	3.0740点
2019年★	115点	51ゲーム	2.2549点

(5) その他

大会の特性（真夏の沖縄、7日間で最大6試合）を踏まえ、また選手の暑熱対策及びコンディション面を考慮して、前後半それぞれでクーリングブレイクに加えて飲水の時間が設けられた。昨年度よりこの方式が取り入れられたが、考え方によっては試合が6分割され、フィジカル面だけではなくメンタル・戦術的に整えることができるとも言える。それも大会全体の特徴に影響を与えている要素ではないだろうか。

①短期間での連戦にも関わらず、試合終了時に交代の枚数に余裕があること

②逆転の試合数が少ないこと

③得点数が極端に減少していること

このあたりについてはまだ制度改正が行われてからの年数が浅いため、関連性については今後検証していくことが必要になるであろう。

3 結びに

前回の沖縄開催であった2010年大会ではベスト4と躍進した西武台は、今回大変悔しい結果となった。新人戦を制覇した昌平高校は9月現在S1リーグの首位を走っているが、関東予選・総体予選いずれも異なるチームが決勝まで駒を進めている。このことから選手権ではどこのチームが勝ち上がったもおかしくないといえる。10月に開幕を迎える決勝トーナメントに向けて各チームがしのぎを削り、全国ではもう一度埼玉県代表が躍動してくれることを期待したい。